

■第1回プラセンタ研究交流会 セミナー■

抗生剤を使用しない治療法

下痢・アルカリ尿とプラセンタ

平成22年5月27日

プラセンタ研究交流会

会長 源平 將充

会長挨拶

現在日本では、ペットを家族の一員とみなし様々な分野でペットと共に生活をする人が増えています。それに伴い、ペットの健康にこだわる人達も多くなっています。そしてその中でもアロマセラピー・バッチフラワー・メディカルハーブ・ホメオパシーなどのより自然な方法で健康にしたいという意識が高まりつつあります。そういった傾向の背景には、化学的な対症療法の影響への疑問があるのではないのでしょうか。

かつてアメリカ製のプレミアムフードが日本に上陸し、それと同時にジステンパー以外のパルボ・コロナウイルスなどの感染症・外耳炎などの皮膚疾患・関節形成不全・椎間板ヘルニア・膀胱炎・ストルバイト・膀胱結石・子宮蓄膿・前立腺肥大・癌などの病気が多くなり始めました。そして、それに伴い抗生剤・ステロイド・免疫抑制剤・インターフェロン・ヒスタミン剤・気管支拡張剤など様々な対症療法薬が使われるようになりました。

そしてある時気がつくと、日本のほとんどの犬は上記の疾病に対しての対症療法薬頼りの状態になっていました。それは病気の慢性化や薬の常習化を生んで、その状態から改善するのは難しいように考えられました。それ以来、病気に対する意識が変わり、対症療法ではなく根本療法に移行していくことになりました。根本療法を行う上でどう予防できるのかと追及していった結果、まず細胞環境の浄化に着目する必要がありました。細胞環境の浄化を図ることでかなりの問題が改善の糸に結び付きました。しかし、それでもまだまだ問題が山積していて病状によっては十分対応できない事があるので、細胞環境の浄化をするものから核に作用するものへの必要性が高まっていました。

その時プラセンタに出会い、これまでの対症療法の作用に並ぶ結果が得られてなおかつ根本的な改善が出来る統合医療を確立する事が出来ました。プラセンタとの出会いは、今後の医療をペットの体に負担をかけない飼い主の望むものにする大いなる一歩となるでしょう。そして、これから対症療法薬から離れてプラセンタにより根本治療法を確立することが全ての飼い主の願いではないかと考えています。

平成22年5月吉日

プラセンタ研究交流会 会長 源平將充
(神奈川県都筑区動物病院ジェムオーナー)

胎盤に含まれる主な細胞増殖因子

・肝細胞増殖因子	HGF	肝実質細胞をはじめ、諸組織の細胞の増殖
・神経細胞増殖因子	NGF	神経細胞(知覚・交感神経細胞)の増殖
・上皮細胞増力因子	EGF	皮膚・肺・角膜・気管上皮細胞の増殖
・繊維芽細胞増力因子	FGF	ヒト繊維芽細胞、グリア細胞、血管内皮細胞の増殖
・インシュリン様成長因子	IGF	軟骨細胞、平滑筋細胞の増殖
・形質転換増殖因子	TGF	非形質転換細胞を可逆的に形質転換細胞に転換(α ・ β ・ γ 2)

免疫力を向上させる
成長因子

コロニー形成刺激因子(CSF)

免疫担当細胞の顆粒球、
マクロージ等の肝細胞の増殖

インターロイキン1(IL-1)

免疫担当細胞(T細胞・B細胞・NK細胞)

インターロイキン2(IL-2)

胸線細胞の増殖、リンホカインの産生促進
T細胞(ヘルパーT細胞・キラーT細胞・
サブプレッサーT細胞)の増殖

インターロイキン3(IL-3)

造血幹細胞、肥満細胞の増殖

インターロイキン4(IL-4)

B細胞の増殖、および抗体産生細胞へ
の分化促進

(「ラエンネックと栄養因子」木本栄治先生著 開成出版)

HGFが有効な病気

- ・肝臓病 劇症肝炎、肝炎、肝硬変、肝臓移植
- ・腎臓病 腎不全、腎臓移植
- ・肺疾患 急性肺炎、肺線維症
- ・消化器病 胃潰瘍、糖尿病、(膵臓細胞再生)
- ・心臓血管病 心筋梗塞、心筋症、閉塞性動脈硬化症、冠状動脈再狭窄予防
- ・筋疾患 筋ジストロフィー症
- ・脳神経症 脳梗塞、パーキンソン病、筋委縮生側索硬化症

2001年1月7日付 朝日新聞より